病院の窓

南部修太郎

青空文庫

十七の五月だつた。私は重い腸チブスに罹つて、赤坂の或る病院へ入院した。

入院して十日餘りは私はまるで夢中だつた。何か怖ろしい物に追ひ掛けられてゐるやうな、遁げても遁げても遁げきれないやうな苦しさのする長い夢にあがいてゐた氣持——そんな氣持で、私はその十日餘りを過した。その間に腦症を起しかけて醫師が絶望を宣告した事、そして、家中の者が枕元に集まつて豫期された私の死に涙ぐんだ事——そんな事は回復期にはいつてから初めて看護婦の武井さんに聞かされた事だつた。

傳染病室から普通の病室へ擔架で移されたのは、六月の中旬頃の事だつた。私は痩せ衰へてゐた。床の上で武井さんに助けられながら寢返りするのがやつとだつた。食物は流動物だつた。本を讀む事もまだ許されなかつた。許されても骨と皮ばかりになつた私の手に、本の重味を支へる力の無い事は明かだつた。で、私は白い天井の蜘蛛の巢を見詰めたり、電氣の球に群る三四匹の蠅の動作を眺めたりしては樂しんでゐたのだつた。

首や手が自分で動かせるやうになつた時、私は見舞にくる母に外國の繪葉書を買つて來て貰つて眺めたり、武井さんに頼んで草花の鉢や切り花などを病院の近くの草花屋から買つて來て貰つた。そして、寢臺の側の臺の上や、窓敷居にパンジイや、フリイジヤや、釣鐘草や、撫子や、マガレツトの花などの順順に變つて行くのを、やつと首だけ動かしながら見て樂しんだ。また暫くして醫師に許されてから、宵の内など武井さんに「豐臣榮華物語」と云ふ講談を讀んで聞かせて貰つた。頭が疲れてゐるので自分で讀む事や、それ以上の感激の深い物は許されないのだつた。その中で淀君と三成の情交を述べた處、または御殿女中の亂行の件に來たりすると、私の入院日數の七十餘日の間一日も休まずに附き添つてゐてくれたその若い武井さんは、聲をひそめたり、飛ばして讀んだりした。眼を塞いで聞き入りながら、私は何時の間にかよく寢込んでしまふのだつた。

窓の外は若葉の美しい初夏の頃だつた。

枕からのし上つて眼を逆樣にしながら眺めると、明るい日光の中に廣い青葉を光らせてゐる桐の木が三本、何時も硝子戸越しに見えた。私は一日一日緑の深くなつてくるその葉を數へたり、處處に酢貝のやうな瘤のあるその枝振を眼をつぶつても覺えてゐられる程見詰めてゐたりした。

「ほんとに葉の縞が綺麗だな……」と、或る時私はびつくりして叫んだ。それは夕方になつて急に雨が上がつて、美しい西日がその葉裏にきらきら光り出した時だつた。

「まあ、そんなに綺麗に見えますの……」と、武井さんはそれが思掛ない事とでも云つた表情を浮べて、窓際に立つてその葉を眺めながら微笑してゐた。

青桐の木の向うには平たい芝生の庭があつた。午後の靜かな時など、よくその眼のさめるやうな青芝の上には、白い服をそよ風にひるがへした看護婦達の二人三人が、低い、けれど透き通るやうな聲で歌を口ずさみながら往き來してゐるのを、私は病み疲れた眼でぢつと眺めてゐる事があつた。

芝生の庭の處處には櫻や檜葉や楓などが立つてゐた。それがとりどりの感じを持つた青葉をまだ柔かな日光に輝かしてゐる朝は、私の一番好きな時であつた。空氣は澄んで新鮮（フレッシュ）な涼しさを持つてゐ

た。それが武井さんにふいて貰つたばかりの頬にひやひやと觸れる時、私はほんとに氣持が好かつた。そして、チチチと何處からとなく聞えてくる朝の雀の囀りに耳を傾けながら、今日誰が見舞ひに來てくれるだらう——などと云ふ事を、樂しみながら考へたりした。

芝生の庭を挾んだ向うには、水色のペンキで塗つたこつちと同じやうな二階建の病室の棟が立つてゐた。そして、其處に八つ並んだ窓の一つ一つの中には寢てゐる病人の黒い頭や、氷嚢を換へたりなどしてゐる看護婦の顔がちらちらと見えた。或る窓には赤い花をつけた花鉢が置いてあつた。或る窓には白い布が干してあつた。聲は高くすれば聞えるくらゐの遠さだつたが、向うの看護婦とこつちの武井さんが時にはわざとらしく半布（ハンケチ）を振つて、相圖をし合つて、無聊を慰めるやうな笑ひを洩らし合つたりするのであつた。

夜になると、その向うの八つの窓にはぱつと電氣が點いた。長方形の明るさを持つた窓が夜の闇の中に、階下と階上とで形よく二條に並んでゐる——そのそれぞれの明るさの中で、或る處では死期の迫つた病人が暗い聲で呻いてゐる、或る處では退院の近づいた病人が明るい聲で笑つてゐる——そんな事をひよいと考へてみると、その長方形の八つの窓の明るさが何となく人間の不思議な運命の縮圖のやうに思はれたりするのであつた。

「ほんたうにあなたのお助かりになつたのは、院長さんも不思議だと云つてらつしやいましてよ……」と、私の生命がどんなに危かつたかを初めて聞かしてくれた時、武井さんはしまひにかう力の籠つた聲で云つて、ぢつと私の顔を見詰めてゐた。

「そんなでしたかね……」と、その詞がまだぴつたり頷けないやうな氣持で、私は武井さんの顔を見返してゐた。

「或る晩なんかは、何度先生の處へ駈けつけて行つたか分りませんわ。ほんとにもう今度こそは——と思つて……」

「何にも覺えてゐませんよ……」

私が相變らず反應のない、うはの空の聲でかう云つたので、武井さんの白い顔には寂しい微笑が浮んでゐた。實際、私は自分がそんな危險な運命に迫られたとは、その時は思へないのであつた。

「ほんとに御當人が一番氣樂で好うございますわね……」と、その日の午後見舞ひに來た母は、武井さんがその會話の事を話して聞かせた時、かう云つて笑つた。が、直ぐその笑ひを抑へて、母は武井さんとぢつと眼を見合せた。

その時のぢつと見合つた二人の眼の中に含まれた或る意味——それから二三日寢ながら考へて行く内に、私はそれがだんだんに分つて行くやうな氣がした。死から救ひ出された自分なのだ——と、私はその事をはつきり考へてみた。と、其處に何か動かし難いやうな嚴かなもののある事を感じた。そして、或る晩、私は涙ぐみながら、何物かに感謝の祈りを捧げてゐた。

衰弱しきつた體はなかなか回復しなかつた。鏡を借りて自分の顔を見る時、青白い皮膚の色や、凹んだ眼や、殺げた頬や、變に尖がつた鼻や、毛の日に日に抜け落ちて行く頭などが、とても自分だとは思へないやうに情無く見えた。胸には肋骨が一つ一つ數へられた。ふくらはぎや腕のふくらみの處は老人のそれのやうにたるんで、觸つてみるとよごれた皮膚がまるで乾干びた木の葉のやうにかさかさしてゐた。

「何時になつたら歩けるでせうね？」と、私は或る時心細くなつて武井さんに聞いた。

「もう直ぐですわ……」と、武井さんは何でもない事のやうに答へた。

六月も末になつてからだつた。或る日武井さんに助けられながら起き上つて、私は寢臺の下に降りてみた。直ぐひよろひよろとひよろけて、私は尻もちをつきさうになつた。私はあわてて寢臺に掴まつた。武井さんが背後から背中を支へてくれた。

「まるで赤んぼですね……」と、私は苦笑しながら、武井さんを振り返つた。

が、それでもそんな事を續けて行く内に、私の足元は一日一日と固まつて行つた。そして、寢臺の縁に掴まりながら一歩一歩と歩いて行く事に、子供のやうな興味を覺えるやうになつた。また時には窓際の曲木の椅子に腰掛けて、庭の景色や、向う側の病室の窓の中をぼんやり眺めてゐる事が出來るやうになつた。

その頃からもう梅雨だつた。陰氣な日が多くなつた。ねり絲のやうなしめやかな雨が青桐の葉や、芝生や、樹木の若葉をしつとりと濡らして、朝から夜がくるまで降り續けてゐる事があつた。誰も見舞ひにくる者もない、さうした日の午後など、私は病後のうら寂しい氣持で窓際の椅子に凭りながら、靜かな雨脚を眺め暮してゐるのであつた。

或る日の午後だつた。武井さんが草花を買ひに行つた留守に、私は一人寢臺を靜に降りて、椅子に凭りながら烟るやうな雨脚を通して見える、向う側の病室をぢつと眺めてゐた。と、私はその二階の病室の右手から三番目の窓に凭つて、同じやうに庭を眺めてゐる若い女をふと見附けたのであつた。

「やつぱり患者だな。新しくはいつて來たのか知ら……」と、私は一人呟きながらその女の方をぢつと見てゐた。と、女も私に氣附いたやうにちらりと視線を向けて、直ぐ芝生の方へ俯向いてしまつた。

「何の病人だらう……」と、その刹那にふと眼に殘つた女のほつそりと痩せた、青白い、如何にも物寂しい感じの輪廓を持つた顏を思ひ浮べながら、私は考へた。やがて、女は靜に身を飜して、白い窓掛の裏に隱れてしまつた。私はそのうしろ姿に何となく暗い影を感じた。そして、武井さんが或る時云つた「お逝くなりになる御病人は何だか初めの氣持で分りますわ……」と云ふ詞を思ひ出して、不吉な豫感にはつと胸を衝かれた。

私は變に暗い氣持にされた。そして、そのままた寢臺の上に横になりながら、暫く白い天井を見詰めてゐた。が、不思議にその刹那の女の顏の印象が頭の中に浮び上つて、ひよいと胸を掠めた不吉な豫感が拭へなかつた。私は眼をつぶつた。輕い毛布で顏を覆つた。が、だんだん憂鬱になつて行く自分をどうする事も出來なかつた。

「ほんとに好い花がございませんの……」と、かう晴れやかに呟きながら病室へはいつて來た武井さんの聲を聞いた時、私は救はれたやうな氣持がして毛布を撥ねのけた。武井さんは雨にしほれたやうな白と赤のコスモスの花を手にして、傍に立つてゐた。

「ダリヤはなかつたんですか？」と、私はふと思ひ出して訊ねた。

「ええ、ありましたわ。でも、もう痛んでて仕樣がないんですの。梅雨時分になりますと、切花は駄目でございますわね……」と、武井さんは答へながら花立に挿さつてゐた古い花を窓外に投げ捨てた。

「向うの二階の病室へ若い女の患者が來ましたね……」と、私はその女の事をまだ氣にし續けながら云つた。

「え、御覽になつたの。會社員の奥さんで肋膜がお惡い上に盲腸炎

なんですつて。どつちもまだお輕いんださうですけれど、ずゐ分面倒な御病人ですのよ……」

「手術でもするんですか？」

「ええ、盲腸の方はどうしてもなさらなきやいけないの。院長さんも弱つて入らつしやるんですつて。だつて、そんな事をすると肋膜の方がねえ……」

「そりやあ大變だ……」と、私は少し誇張した聲で云つた。そして、傍の壁の白い空虚な面を譯もなくぢつと見詰めてゐた。死ぬ病人——さうした暗い意識の中に、陰氣なさつきの女の顏が何時となく重つて行くのだつた。

「綺麗でせう。ちよつと御覽なさいな……」と、武井さんは滿足さうな聲で呼びかけた。

「ええ、綺麗ですね……」と、私は花立に挿さつたコスモスの花を眺めながら云つたが、何となく何時ものやうな明るいなごんだ氣持にはなれなかつた。

それからまた二三日經つた、或る夜の十時頃の事だつた。日の内から少し生暖かな風の吹く日で、窓の硝子には横なぐりの雨の滴が着いては消え着いては消えしてゐた。私は寢臺の上に、武井さんは少し離れた疊の上に何時ものやうに眠つたのだつたが、部屋の空氣が蒸蒸して私はどうしても寢つかれなかつた。そして、もう寢入つてしまつたらしい武井さんの靜かな息の音を聞きながら、涙ぐみたいやうな寂しさに捉はれてゐた。

と、私の隣の、そのも一つ先隣の病室の扉が開いて、醫務室の方へ急いだらしい人の足音が私の病室の前を過ぎた。暫くすると、また三四人の靜かな足音と囁き聲が遠くの廊下から近づいて來て、その病室の方へはいつて行つた。そして、またしんとなつてしまつた。

「臨終が來たのぢやないか知ら……」と、私は急に不安に胸を衝かれながら考へた。その病室にはアメリカへ出稼ぎに行つて、肺結核に罹つて、故國で死にたいと云ふ望みから重體のまま歸朝して來た中年の紳士が、その十日程前からはいつてゐたのだつた。

「もう長くはないんですつて。ほんとに奥さんがお氣の毒ですわね……」と、武井さんは五六日前に庭の芝生の上に出てゐた、まだ若若しいその奥さんを私に教へながら、彼の身の上の事を話し聞かせてくれた。

耳を澄ますと、その病室の方は相變らずひつそりとしてゐた。別に啜り泣くやうな聲も聞えなかつた。まだ其處までは行かないのかも知れない——と云つたやうな安堵が私の胸に湧いた。

「然し、故國で死ぬ——それが彼にとつてどれだけの滿足になつただらうか？」と、幾らか眠くなつて來た頭でそんな事を考へてゐる内に、遠い廊下の時計が十一時を寂しく打つた。窓外の雨音はまだ盛に聞えてゐた。

その翌朝だつた。漸くお粥になつたばかりの朝食を食べてゐると、病室の外を通るゴム車の軋りがふと聞えた。

「あのね、この先の結核の患者の方ね。とうとう昨晩お逝くなりになつたのよ……」と、武井さんは急に聲を低めながら囁いた。

「ああ、とうとう……」と、私は靜に頷いた。やつぱりあの時が臨終だつたのか——と、私は心の中で呟いた。が、それがその時は人生の家常茶飯のやうに驚きとも悲しみとも胸に響かなかつた。そして、私は屍體運搬車に違ひないその車の遠い軋りの跡にぢつと耳を傾けてゐた。

その日の午後——もう夕方近くになつて雨がからりと晴れて、雲切の間から夏らしく澄んだ紺青の空が見え出した。そして、傾きかけた赤い西日が樹木の水玉にきらきらと光つた。丁度、見舞ひに來た友達が歸つて間もない頃の事で、ふと物寂しい氣持になつた私はまた窓際の曲木の椅子に凭りながら、そのすがすがしい病院の庭の暮色を眺めてゐた。

「あ、またあの奥さんが覗いてゐますよ……」と、私はひよいと向う側の二階の右から三番目の窓に氣が附いて、傍の武井さんを振り返つた。

「さうですか……」と、膝に白い毛糸の球をころばしながら何かを編んでゐた武井さんは、編棒の手を止めて窓の方に首を差し延べた。

「厭やな顔色をしてますね……」と、私は雨上りの夕方の、さはやかな氣持をまた何となく暗くされながら云つた。

「ええ、ほんとに。ちよつと顔立は好い方なんですけれどね……」

「惡いんぢやないんですか?」

「さうらしいの。明後日あたり盲腸の手術だつて——附添の本田さんが云つてましたわ……」と、武井さんも顔を曇らせながら云つた。が、直ぐふいと氣附いたやうに詞を續けた。「ちよつとちよつと、あれが檀那樣なんですよ……」

教へられてその窓の方を振り向くと、何時の間にか紺の脊廣を着た若い紳士がその女と並んで、胸から上を窓臺に凭せ掛けながら立つてゐた。二人は時時何か話し合つてゐるらしく、その唇の動くのが見えた。私はその二人の間に何か寂しいものを感じて、ぢつと視線を送り續けてゐた。と、向うからは半分桐の木蔭で見えるに違ひないこつちの窓を、その時二人は同じやうに眺めた。そして、私の存在をはつきり氣附いたやうな表情を浮べると、顔を見合せて何かを囁き合ふ樣子だつた。

「向うの窓に痩せこけた青年がゐませう。チブスで危い處を助かつたんですつて。運の好い人ですわね……」と、その刹那に女が夫にそんな事を囁いてゐるかも知れない事を感じて、私は何となく微笑したいやうな氣持になつた。その時武井さんがまた云つた。

「あの檀那樣があの奥さんにお優しいつてもう評判になつてゐますわ……」と、武井さんのその白い顔にはコケツトな感じのする微笑が浮んだ。が、私はその武井さんを見返りながら幽かに不快な氣持を感じた。そんな噂話が何となくその人達に殘酷な事のやうに思はれたのだつた。

「ほんとに優しさうな人ですね……」と、私はわざとそんな事を云つて、またその窓の方を振り向いた。が、もう其處には二人の姿は見えなかつた。白いカアテンが赤い西日に染まつて靜に搖れてゐるだけだつた。

「何て噂話の好きな人達なんだらう……」と、私はふとそんな事を心の中で考へながら、武井さんの顔をちらりと見た。實際、そんな風に一人一人の病人の噂話はまるで小鳥のやうな看護婦達の唇から、病院の隅から隅へと傳はつて行くのだつた。で、大概の病人は病室から一歩も出ないのに、よく其處此處の病人に就いて知る事が出來た。

「この先の向う側の病室に若い支那人の患者がゐますの。それが病氣でも何でもないんですよ……」と、或る時武井さんがそんな噂話を私に聞かしてくれた事もあつた。「支那人の中にはよくそんな厭やな人がゐますの。お分りになつて、看護婦をね……」と云ひ出し

た事を云ひ續けにくさうに云つて、武井さんは不意に口を噤んでしまつた。私は何となく顔が赧らむやうな氣持がして俯向いた。そして、そんな意志を持つばかりにこんな病院生活を送つてゐる支那人の心持がどうしても頷けない氣がした。

「變な人間もゐるもんですね……」と云つて、私は上ずつた聲で笑つてしまつた。

何時しか七月も中旬に近くなつた。陰氣だつた梅雨の日も忘れたやうに過ぎて、緑の深くなつた桐の葉に照る日光が急にギラギラと夏めいて來た、病室の中は暑苦しくなつた。が、その頃から私はまだひよろひよろする足を踏み締めながら、十間、十五間と廊下を散歩出來るやうになつた。そして、私は涼しい風の吹く廊下の、庭の出口に置いてある籐の寢椅子に凭つて、長い間さえざえしい庭の緑を眺めてゐる事があつた。

「手術の結果はどうなつたらう……」と、三四日窓に見られなくなつた青白い顔の女を思い出して、或る時私は呟いた。そして、其處から斜向うに見えるその窓を見上げた。と、窓には白いカアテンが降ろしてあつた。何か知らそのカアテンの裏に暗い物が隱れてゐるやうな氣がしてならなかつた。

その頃から私はもう退院の日を樂しむやうになつてゐた。院長が大事をとつてその日をなかなか許してくれないのがもどかしかつた。六十日餘り——と、それが思掛ない事でもあつたやうに入院日數を數へてみて、私は或る晩急に懷しく自分の家の事、自分の部屋の事、家のまはりの景色などを思ひ浮べた。と、やがて其處へ歸る事が初めての家へ引つ越してでも行くやうな樂しさをそそつた。また或る朝初めて病院の玄關口へ出てみて、其處から前の電車通を眺めた時、その平凡な町の景色が私の眼にはどんなに懷しく、どんなに珍らしく、どんなに不思議に思はれたか分らなかつた。それは名所などと云はれる美しい景色などを眺めてゐるよりも、もつともつと樂しみな事だつた。そして、町を通る人達の一人一人が自分の友達ででもあるやうに感じられた。

退院がもう四五日に迫つた或る日の朝だつた。空は午後の蒸暑さを語るやうにどんより曇つてゐたが、朝の食事を濟して窓際へ凭つてみると、私の向うの、青白い顔の女の病室の窓から暗い顔で庭を見降ろしてゐるその夫の姿を珍らしく見附けた。そして、窓臺の上には氷嚢や白い布が三つ四つ干し並べてあるのに氣が附いた。その數日、病院外の事柄や退院後の生活などに心持を惹きつけられてゐた私は、その女の事をすつかり忘れてしまつてゐた。で、その時ひよいとその夫の暗い、憂愁に包まれたやうな顏附を見ると、私は手術後の女の容體が人事ならず氣遣はれ出したのだつた。

「やつぱりいけないんぢやないだらうか?」と、その時またカアテンの降されてしまつた窓を見詰めながら、私は考へた。

退院がいよいよ明日と云ふ日だつた。母や妹達はその午後新しい單衣物などを持つて訪ねて來た。部屋の中には明るい感じが漲つた。私の胸はただ歡びに躍つてゐた。そして、母が包みきれない嬉しさを顏に表しながら武井さんに長い看護の禮詞を述べてゐるのや、武井さんがしみじみした聲で母に祝ひ詞を返してゐるのにぢつと耳を傾けてゐた。が、母も武井さんもさうした詞を交しながら、眼は涙ぐんでゐるのだつた。

夕方もう薄暗くなつてから母達は歸つて行つた。私の食膳をさげると、武井さんも自分の食事をしに行つた。私はぽつかりと電氣の

點いた靜かな部屋の窓際に、何時ものやうに曲木の椅子に凭りながら涼しい風に吹かれてゐた。生命を救はれた病院の最後の夜……そんな事がふと考へられた。と、抑へきれない歡びの心の底にも何となく涙ぐまれるやうな、しめやかな氣持が湧き上つて來た。が、さうした氣持が何故湧き上つてくるかは、私にははつきり分らなかつた。

夜の暗い幕はだんだんに病院の内外に擴がつて來た。そして、その暗さの中に向う側の八つ並んだ病室の窓の明りがくつきりと見え出した。が、ふと見上げると、その二階の右から三番目の窓には昨日のやうに白いカアテンが降されてゐて中の樣子は見られないのだつた。私は寢臺に横はつてゐるあの女の青白い顏、それをぢつと見詰めてゐるに違ひないその夫の憂ひげな顏を思ひ浮べてみた。と、不意にまた不吉な豫感が頭の中を掠めて行つた。私は思はずぎよつとして、深い紺青に澄みきつた星空を見上げた。

「ええ、今夜中は持つまいつてお話ですわ……」

その女の容體に就いて聞いた時、武井さんはかう云つて沈んだ眼を伏せた。私は退院と云ふ明るい氣持もすつかり失つて、カアテンの締まつてゐたその窓を何時までもぢつと眺めてゐた。

青空文庫情報

底本：「若き入獄者の手記」文興院
　　1924（大正13）年3月5日発行
入力：小林徹
校正：はやしだかずこ
2000年10月5日公開
2006年1月9日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

病院の窓

南部修太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/